

お秀の父

野村胡堂

—

ガラツ八の八五郎が、両国の水茶屋朝野屋あさのやの様子を、三日つづけて見張っておりまして。

「近頃変なのがウロウロして、何を仕掛けられるか気味が悪くて叶わないから御用のひまなとき、八五郎親分でもときどき覗かして下さいな——」

朝野屋の名物娘お秀が、人に反対や遠慮をさせたことのない、圧倒的な調子でこう平次に頼んで行ってからのことでした。

そのころお秀は二十六の年増盛り、啖呵たんかがきれて、小股こまたが締って、白粉が嫌いで、茶碗酒が好きで、両国きつての評判者。その親父の留助は、酒の好きな

ところだけが娘に似ているといった、店番に生れ付いたような、平凡そのものの六十男でした。

茶汲ちやくみ女は三人、小体こていな暮しですが、銅壺どうこに往来の人間の顔が映ろうという綺麗事に客を呼んで横網よこあみに貸家が三軒と、洒落しゃれた住宅まで建てる勢いだったのです。

九月のよく晴れた日の夕暮。

「あッ、お前さん、錢箱なんか覗いて、何をするんだい」

お秀は土間に飛び降りると、木綿物の裕あわせに、赤い麻あさの葉の帯をしめた十七八の娘の袖を掴んでグイと引きました。

「何んにもしませんよ」

極端おびに脅えて、おどおどする娘は、これも白粉っ気のない、不思議に清純な感じのする——お秀とは違った世界に住む種類の人間でした。

「何んにもしないことがあるものか、若い娘の癖に、錢箱なんか覗いたりして、この中にはからくりも品玉もありやしなないよ、——あ、八五郎親分、ちょうど宜いところでした。この娘を縛しばって行つていきなり二三束ぞく引つ叩いて見て下さいよ。泥を吐かなかつたら、お詫びをしますから、さ」

お秀は娘の肩を掴んで、ガラツ八の方に押しやるのです。

「泥鱒どじょう見たいなことを言うなよ、可哀想に娘は泣いてるじゃないか」

八五郎はノツソリと店先へ入つて来て、張りきつたお秀の顔と、シクシク泣いている、貧しそうな娘の顔を見比べております。

「泣くのは術てですよ。冗談じゃない、早く何んとかしなきや、人立ちがするじゃありませんか。——この間から変なことばかり続くとしたら、やはり物盗りだつたのねエ」

お秀の片頬には、意地の悪そうな——そのくせ滅法魅力的な冷笑が浮ぶので

した。

「どうにも仕様がな^いじやないか、錢箱を覗いたつて、小判が蛙かえるに化けるわけじやあるめえ。人間氣の持ちようじや、錢箱も雪隠せっちんも覗くだろうじやないか。それだけの事で人一人縛るわけには行かねえよ」

八五郎はこんな事を言いながら、何んとかして娘を逃してやりたい心持になつていたのでした。お秀ののしかかつて来る年増美のうつつ鬱陶しさに比べて、この娘はまた何んという素朴そぼくな存在でしよう。

「本当に頼み甲斐のない人ねえ。そんな事じや用心棒の足しにもならないじやありませんか、チエツ」

お秀は大舌打を一つ、八五郎を搔きつけて、娘の胸倉を掴みそうな見幕です。

その頃の下つ引などの中には、ときじせつ季時節の心付けを貰つて、水商売の用心棒を兼ねていたのもあつたのですから、お秀は親分の平次に頼んで、ガラツ八を用

心棒に雇いきり、晦日みそかにでもなったら、二朱か一分も包んでやろうといった、すっかり主人気取でいたのも無理のないことでした。

「聞捨てにならない事をいうじゃないか。俺がいつお前の店の用心棒になった」
正直者のガラツ八が、ムキになってそれを迎えました。

「おや、おや、おや、——それじゃ八五郎親分、お前さんは泥棒や巾着切きんちやくぎりを逃がしてお役目が済むというんですか」

「何？」

「娘は——あれ、あんなにあわてて逃げて行くじゃありませんか。錢箱の中から小錢でもなくなっていたら、どうしてくれるんですッ」

「小娘が睨んだだけで、錠をおろした錢箱の中から小判が飛んで行くかよ。宜かげんい加減かげんにしないか」

「鳥もちつてで釣つる術てもありますよ、——本当に焦じれたいね」

「焦れたいのは俺の方だよ、——最初からない小判が、盗まれっこないじゃないか」

「何んだとえ、親分」

争いは次第に真剣になって行くばかりです。両国名物のお秀、弱い稼業の女には違いありませんが意地も張りも、刃のように尖鋭せんえいになりきって、青侍や安岡っ引に負けている女ではなかったのです。

「何を騒ぐんだ、——大変な人立ちじゃないか」

ちようどその争いの中へ、親分の銭形平次がブラリと入って来ました。

「親分、聞いて下さい、——口く惜やしいじゃありませんか。八五郎さんは可愛らしい娘だからって、怪しい人間を逃がしてしまつて——」

「ま、待ってくれ。そうまくし立てられちゃ話がわからない。一体これはどうしたということだ」

平次はいきり立つお秀を押えて、とにもかくにも話の順序を立てさせました。

二

「なるほど、一応は尤もだが、八五郎にしては、それだけの事で人を縛るわけに行くまい」

平次はお秀を撫めながら、ようやく散って行く往来の人や、茶代を置いて、つまらなそうに出て行く店の客人を眺めやります。

「だって見す見す怪しい人間を逃がしてしまっただじゃありませんか。この間から、いろいろ変なことばかり続くけれど、あの娘が一番執拗く奥を覗いたり、裏へ廻ったり、女どもに立入ったことを訊いたりするんです」

お秀の怒りは紛々として容易に納まりそうもありません。

「そんな事をいえば、世間には怪しい人間は沢山あるよ。それを一々とがめたり縛ったりしていた日には、江戸の人間の半分ほどは岡っ引にしなきゃなるまい。ちよいと怪しい事があつても、何事もなく済めばそれで宜いとしたものさ」

「そんな事があるのですか、親分。怪しい奴や怪しい事を、江戸中にないよにするのが、親分方の務めつとじゃありませんか」

お秀もなかなか負けては居りませんでした。

「俺達の眼から見れば、——お前たちは気が付かないだろうが、——この店にだつて二つや三つの怪しい事がある。それを一々とがめ立てすると、楊枝ようじで重箱の隅をほじくるようになるから、なるべく素知らぬ顔をして、何事もなくて済むように仕向けるのが、俺たちの本当の務めさ。人間を縛ることなどは、末の末だよ」

平次は少し道学先生めきました。お秀のいきり立なだつたのを撫めて、ガラッ八

の間の悪い立場を救うためだったのでしょうか。

「二つ三つ怪しい事？ 気になるじゃありませんか、親分。どんな事が怪しいんです。訊かして下さいな」

お秀は少しからい気味になりました。平次の言葉を、当座のがれと見て取ったのでしよう。

「そんな事はいわない方が宜い」

「でも、それじゃ安心して居られないじゃありませんか。錢箱を覗いたり、へんな事を訊いたりする娘より、もつと気になることがあつちや、この店を開けて置くわけには行きません」

「よしよし、それ程いうなら教えてやろう、——ツイ今しがた余分の茶代を置いて外へ出て行った若い男があつたらう」

「え」

「二十二三のちよつと良い男だ、——町人風には相違ないが、出は武家らしいな。雪駄せったの金が鳴り過ぎるし、月代さかやきが狭いし、腰が少し淋しそうだ、——あの若い男を、お前は怪いあやしとは思わなかったのか」

「？」

「自分の懐ばかり覗いていたろう、——お前の言い草じゃないが、あれは懐中の錢箱を覗いているんだよ、——多分親の金でも持出したんだろう」

「それだけですか、親分」

「まだあるよ、もう一人ツイ先刻出て行った四十五六の女があつた筈だ。身扮みなり

もよくなかったが、ひどく物を考えていたぜ——あれは身投げの場所を捜しに両国へやって来たのさ。つかまえて、不心得を意見してやりたいが、いかに十手捕縄を預っている俺迷でも、往来の人をつかまえて『身投げは思い止るが宜い』とはいえない」

「どうしてそんな事が、親分」

お秀もすっかり面喰わされてしまいました。

「少し気が付けば、誰にでもわかる事だよ。あの女は、粗末ながら身分がキチンとしているくせに、履物が右と左が違っていた——鼻緒も、塗も——」

「？」

「四五六の女というものは、この世の中でいちばん行届く人間だ。俺たちのような物事の裏ばかり読んでいる人間も、四五六の女にはときどき背負投を喰わされる、——その年頃の確り者らしい女が、湯屋や寄席の帰りで履物を間違えたのならともかく、両国の盛り場を、跛の下駄を履いて歩くわけはない」

「親分」

「そう気が付いたところで、親の金を持出した道楽息子や、嫁に苛められて身投げの場所を見に来た姑を、往来でつかまえるわけには行くまい」

「親分、そんな事じゃありませんよ。現にこの帳場の錢箱を——」

「待ってくれ、お秀」

「この錢箱を幾度も幾度も覗くのは、私に取っちゃ、道楽息子や身投げ女と一緒ににはなりませんよ」

お秀はなかなか引込む様子もありません。

「こいつはいつて宜いか悪いか解らないが、——その娘の覗いたのは、錢箱じゃなかつたんだぜ」

錢形平次は思いも寄らぬ事を言うのです。

「親分」

「娘はその土竈へつついの横を覗いたんだ」

「え？」

「その土竈は年代ものらしいが、横の方に壊れて繕つくろった跡があるだろう。そこ

の板が取外しが出来るようになっていた様子で、何んか手摺てずれの跡がある——
その中に思いも寄らぬ大金が隠してないとも限るまい、それとも連判れんぱん状かな」

平次はそう言って、面白そうに笑うのです。

「ま、親分」

お秀の口も完全に封じられました、その時、

「お秀、なにをつまらねえ事を言うんだ。親分が御迷惑なさるじゃないか、——
——どうも相済みません。氣ばかり無闇に強くなって、飛んだ女でございます」

簾すだれの影から首だけ出した父親の留助は、臆病らしくピヨコリとお辞儀をしました。五十前後の脂あぶらの乗った大親爺で、娘のお秀と違って、何んとなく気が弱
そうです。

「あれは本当ですかえ、親分」

両国の帰り、宵闇の柳原をブラリブラリと歩き乍ら八五郎はたまり兼ねたように訊くのです。

「何が？」

「親分の見立てですよ、——親の大金を持出した息子だの、身投げの場所を捜す女房だの——」

「嘘だよ」

平次の応えの頼りなさ。

「へエ——」

「皆んな嘘だよ、木当の事はたった一つもないのさ」

「へエ——あれがねえ。驚いたね、どうも、何んだってあんな拵え事をいった

んで？」

ガラツ八も、さすが驚きました。辻の八卦屋はっけや見たいな高慢な顔をしていった言葉が、全部いい加減な出鱈目でたらめだとすると、それはいったい何を意味することになるでしょう。

「今に判るよ」

平次はあまりそれに立ち入りたくない様子です。

「娘が覗へっついいていた土竈の仕掛けも嘘ですか、親分」

「あれだけは本当さ」

「へエ——」

ガラツ八には益々判らなくなります。

「あの懐中ばかり見ていた息子も、錢箱の裏ばかり覗よしいていた娘も、逃げたと見せて、実は俺の話を葎簾よしずの外で聴よいていたよ。俺はあの二人に土竈の仕掛けの

事を聴かせてやりたかつたんだ」

「へエ——？」

ガラツ八にはいよいよ以て解りません。

「二三日前にお秀が来て、変なことがあるから、お前を用心棒に貸してくれと
いった時から、俺はあの家を見張っていたのさ、——そして、あの水茶屋の親
爺の留助というのは、中国筋の大藩の浪人者で、鳴川留之丞という者の世を忍
ぶ姿と知つたんだ、——そのうちに一と騒動始まるよ。見ているが宜い」

「へエ——」

ガラツ八は何が何やら解りませんが、平次はどうやら重大なことを嗅ぎ出し
て、その発展まで大方察している様子です。

が、事件の破局を見るために、そんなに待っている必要はありませんでした。

翌る朝。

「親分、両国に殺しがありましたよ、すぐ願います」

バラ撒くように網を張っていた下つ引が、平次の寝込みを驚かしたのです。

「どこで誰がやられたんだ」

「朝野屋の親爺ですよ」

「あッ、とうとう」

「不思議なことに、水茶屋の中で、もう一人浪人者が殺されていますよ」

「そいつは大変だ」

平次は手早く用意をして、飯も食わずに飛び出しました。

両国へ行つて見ると、まだ時刻が早いので大した人立ちもせず、

「親分、どうしましょう、父さんが——」

お秀の熱っぽい眼が入口に迎えて、何やら平次に訴えます。

「気の毒だが、こんな事にならなきゃ宜いがと思つていたよ」

「親分はそんな事まで見抜いていたんですか。それじゃ、どうして用心させて下さらなかったんです」

お秀は平次に食ってかかりそうでした。

「それが出来なかった、——どれ、見せてくれ」

平次は事件に触れたくない様子で、お秀をかきのけるように入りました。

「親分、お早よう」

「八か。大層早かったんだね」

「こんな事にならなきや宜いがと思いましたよ」

「口真似くちまねをするな」

八五郎が避けたのを見ると、五十年輩ねんばいの浪人者が一人、一刀を提げたまま、

自分も脇腹をえぐられて、土間の床几に俯向になって死んでいるではありませんか。
んか。

「鞍掛宇八郎——」
くらかけ

「親分は知っていないさるんで？」

「近ごろ知ったばかりだ、——きのう錢箱を覗いた娘の父親だよ」

「えッ」

「後ろから刺すのは卑怯ひきようだが——正面から向っては討つ見込みがなかったのか
な」

平次はつくづくそんな事を言うのです。

「見ていたようですね、親分」

「どれ、もう一人の方を見せてくれ」

「此方ですよ」

下っ引の一人が指したのは、土竈の裏、問題の錢箱の蔭。水茶屋の親爺留助は、これも一刀を抜いて犇ひしと握ったまま、右の肩先から深々と斬り下げられて

死んで居たのです。

「八、土竈へっついへは誰も手をつけないだろうな」

「親分が来なさるまで、そつとして置きましたよ」

「そいつは有難い」

死骸の側、土竈へ眼を移すと、修繕しゅうぜんの跡と見せた右側の板——一尺に五寸ほど剥ぎ取られ、その跡には真つ黒な穴が一つ、ポツコリと口を開いているではありませんか。

手を入れて見ると、

「おや？」

中から出たのは紙片が一枚。

身の丈五尺四寸五六分、中肉にて眼鼻大なる方。髯の跡青く、受け口にて、前齒二本か欠け落ちたり。右耳みみたぶ朶に小豆粒ほどの黒子あり。言葉は中国なま訛り。

声小にして、至って穩かなり——

「こいつは留助の人相書だぜ、親分」

八五郎は覗き乍ら、水茶屋の親爺の死骸と見比べます。

「その通りさ」

「留助は自分の人相書を、土竈の中へ入れて置いたんでしようか」

「それは解らねえが、とにかく、昨日この店へ入って、自分の懐の中ばかり覗いている若い男があったろう」

「親分が——親の大金を持出した息子——と見立てた」

「この若い男の懐の中に、この人相書があったのさ」

「それじゃ下手人は判ったようなものじゃありませんか、親分、早く挙げてしまいませんか」

「待て持て、逃げも隠れもする相手じゃねえ。それより、調べるだけここを調

べて行こう」

平次は落着き払って四方を眺めました。店の先にはもう、弥次馬が一杯に立っております。

四

「お秀、隠さずに言ってくれ」

平次はいきなり、涙一滴てきこぼさぬ娘のお秀に声を掛けました。勝気なお秀は、激情と悲嘆を押し包んで、焼金のような猛烈な復讐心を眼一パイに燃やしつづけているのです。

「何を隠すもんですか」

「それじゃ訊くが、お前の父親留助、

——実は浅野様家中の鳴川なるかわ留之丞が国許

を退転したのは、たしか十二年前だったね」

「えッ？」

「だから隠すなど言ってるじゃないか、——その時江戸へ持って来た大事な書き物があった筈だ。それをこの土竈へつひいに隠してから、何年になるんだ」

平次の問いは恐ろしく穿うがったものです。

「そんな事を、——知るものですか、親分」

お秀の調子は少し自棄やけになります。



「俺は、お前が——変な人間が附け狙うから、八五郎を用心棒に貸せと言って来た時、誰にも知らさずにここへ来て、お前の父親にも当って見たが、どうしても打明けてくれねえ。仕方がないから店の表裏を覗いたり、お前たち親子を跟けたりする浪人者親子と、もう一人別口の若い男があることを見届けて、その方から搜って見たんだ。これは素姓を包むわけでもないから、すぐ判ってしまつたよ。一人は芸州浪人鞍掛宇八郎——此方に死んでいる浪人者だ。その娘のお京——それからあとの一人の若者は、同じ芸州の浪人砧右之助——」

平次の話の行届くのにお秀もさすがに胆を潰した様子です。

「二人の素姓が判ると、浅野様御留守居に願つて、十二年前の経緯が手に取る如く判ってしまった。話して聴かせようか、お秀」

検屍の役人の来るまでは、死骸に手の触れようもありません。平次は床几に

腰をおろして、しばらくの暇を、こう静かに語り進むのでした。

芸藩の三人侍、鳴川留之丞と、鞍掛宇八郎、砧右三郎（砧右之助の父親）は無二の仲でしたが、腹の黒い鳴川留之丞が、永年に亘わたって役向の非曲を重ねていることを発見した鞍掛、砧の二人は、涙を流して忠告し、聴き入れなければ、上役に訴えてもとまで強意見こわいけんをしました。

鳴川留之丞はそれを怨うらんで、砧右三郎と鞍掛宇八郎が、役柄で預っている芸州城の絵図面を盗み出し、多年積んだ不義の富を拐かいた帯たいして江戸の埧るっほ場ばの中に深く隠れてしまったのです。

そのため、責任者の砧右三郎は死に、鞍掛宇八郎は、長の暇いとまになって芸州を退散、十二年の歳月を重ねて、ひとり鳴川留之丞を捜して居たのでした。

砧きぬた右三郎の子息砧右之助と鞍掛宇八郎は、目的は同じながら、全く別々に行動しましたが、機会が熟したもののか、二人とも略ぼく一緒に鳴川留之丞の隠れ家――

—水茶屋の朝野屋を突き止め、夜となく昼となく中の様子を覗うかがったのです。押入って、ひと思いに鳴川留之丞の留助を討ち取るのは何んでもありませんが、それより先に二人は絵図面の隠し場所を突き止め、それを旧主浅野家に還かえさなければならなかったのです。

「昼の一罅らひを娘の右京さんから聴いて、事の切迫を覚った鞍掛宇八郎は、鳴川留之丞に直々の掛合をする心算つもりで昨夜ここへ乗込んで来たに相違ない。二人はさんざん言い争った揚句、抜き合せると、手もなく鞍掛宇八郎は勝った、——
が」

「誰が、その勝った鞍掛宇八郎を刺したのでしょう」

「さア？」

平次の明察もそこ迄は届き兼ねたのです。

「どうかすると、砧きぬた右之助と言った、あの気の弱そうな若い男じゃありません

か、——鳴川留之丞を鞍掛字八郎に討たれた上、大事の絵図面まで取られちゃ、砧家は浮ぶ瀬はない」

「——」
平次の疑うたがいもそれだったのです。

「ね、親分」

「それは考えられない事はないが、後ろから突くのはあんまり卑怯ひきようだ。それに、自分の持っていた人相書を土竈へつづいの穴へ入れるのは変じゃないか」

「とにかく、あの若い浪人者をしょつ引いて来ましようか」
とガラッ八。

「砧右之助は駒形の六兵衛店だなに、偽名ぎめいもせずにいる。丁寧につれて来るが宜い、——それから、鞍掛字八郎の浪宅は少し遠い。本郷丸山の手習師匠だ、これも誰か人をやるんだ——お前はここにいる方が宜い」

「へエ——」

ガラツ八は飛んで行きました。下つ引を二三人狩り集めて、走らせる心算つもりでしよう。

五

「お秀」

手配が一段落になると、平次は静かに話を向けましたが、当のお秀は以ての外の不機嫌さです。

「ここは毎晩誰が泊るんだ」

「決っちゃいませんよ、相吉さんが泊ったり、弁次郎さんが泊ったり」

「それは何だ」

「相吉さんは私の従兄いとこで、弁次郎は用心棒ですよ。——二人とも、いま駈け付けて面喰めんくってるじゃありませんか」

「何方が相吉だ」

「あつしで」

平次の声に応じて出たのは、二十五六のちよつと肌合の意気な男でした。

「小遣こづかいはふんだんにあるのか」

「御冗談で、親分」

平次の唐突とうとつさに、相吉はすっかり面喰めんくっております。

「弁次郎は？」

「あつしで、へエ——」

ピョコピョコと三つ四つづげ様にお辞儀をしたのは、三十二三たくまの逞たくましい男。顎の四角なのと、眼の鋭いのと、法外に腰の低いのが、この男をひどく精力的

に見せます。

「ドスを持っているかい」

「へエ——」

「出して見せな」

この問いも弁次郎を驚かすに十分です。

「用心棒が拳固げんこ一つということはあるまい、遠慮せずに出すが宜い」

「へエ——」

弁次郎は観念したらしく、腹巻を搜さぐってあいくちヒ首を一口取出し、柄を逆さかにして、平次の掌ての上に載せます。

「見事な道具だが、血は附いちやいないな」

「親分、御冗談でしょう」

少しあわてた弁次郎に、平次は面白そうに笑ってヒ首あいくちを返してやりました。

「ゆうべは二人とも外へ出なかつたんだな」

「へエ——珍らしく親方が店へ来て泊るつて言うから、あつしと相吉さんは、よこあみ横網の家の二階で夜中まで話し込んで、さんざんお秀さんに小言を言われながら寝ましたよ」

弁次郎はそんな事まで、先を潜くぐつて弁解べんかいするのです。

「八、しばらくここを頼むぜ。一人も外へ出しぢやならねえ、宜いか」

「親分は？」

「ちよいと八卦はっけでも置いて来るよ」

平次は笑いながら出て行きました。行先は横網のお秀の家であったことは言う迄もありません。

留守番は下女が一人。

「ゆうべここに泊つたのは誰と誰だ。隠さずに言え」

「親方が店へ泊った外は、皆んなここに居ましたよ」

「お秀はどこへ寝る」

「梯子段はしごだんの下へ、——三人のお茶汲みといっしよに寝ますよ」

下女の口は思いの外滑なめらかに動きます。

「二階は？」

「相吉さんと弁次郎さんが、夜更けまでベチャベチャ話して居るんで、姐さんに小言を言われていました」

「お秀は下から怒鳴どなったんだな」

「へエ——」

「二人とも」と晩中どこへも出ないだろうな」

「出られるわけはありませんよ、梯子段は一つだし、格子は釘付けだし」

下女は思いの外気が廻ります。

「二階を見せてくれ」

「へエ——」

十手を見せられると、文句はありません。平次は呆氣あつけに取られている下女を尻目ほかに二階へ上りましたが、屋根は真新しく、格子は嚴重な釘付けで、梯子より外ほかには外へ出る道があるうとも思われません。押入から二人の持物を引出し見ましたが、よくよく困って居ると見えて錢も金も百もない有様。血刀などは素もとより隠してある筈もなく、何もかも平次の予想を裏切ってしまった。

「相吉と弁次郎は、二人とも昨夜飯ゆうべを食ったかい？」

「いえ、弁次郎さんは、お腹の加減が悪いとか言つて、二階から降りて来たのは相吉さん一人でしたよ」

「朝飯は？——それも相吉一人か」

「いえ、弁次郎さんも今朝けさは降りて来ました。まだあんまり食が進まない様子

でしたが」

「二人は金づかいは何うだ」

「二人ともまだ若いんですもの」

「借金は？」

「私からまで借りるくらいですから——」

この下女には、相吉と弁次郎を顎で使いそうなところがあります。

「二人は脇差を持っているかい」

「相吉さんが持っていますよ」

「見えないようだが」

「質にでも入れたんでしよう」

お秀の父
それでは疑う張合もありません。平次はもういちど二階へ行きました。念のため格子へブラ下げて朝陽に干してあつた袷が弁次郎のだということ確かめ、

その腰のあたりから埃ほこりをつまみ取って、それから二人の履物はきものをしらべて、

「相吉と弁次郎と、何方が声大きいんだ」

こんな変なことまでも訊きます。

「弁次郎さんは柄に似ない小さい優しい声で、相吉さんは大きな声ですよ」

「よしよし、飛んだ世話になったな」

平次はお世辞を言い捨てて、疾風しつぷうの如く両国の水茶屋に引返しました。

六

「八、解ったよ」

平次はいきなりこんなことを言いながら飛び込んだのです。

「何が解ったんで、親分？」

八五郎は顔へ掛った蜘蛛の巣でも払うような手付きをしました。

「皆んな解ったよ、鞍掛宇八郎を殺した奴も、——盗んだ金を隠した場所も」

「えッ」

「鞍掛宇八郎を刺した血刀がないんで俺は骨を折ったが、眼の前の大川が流れていることに気が付かなかつたんだ。ちよつと出て俺の立てた目印めじるしのあたりを覗いて見ねえ、底に脇差が一口沈ふりんでいるのが、よく見えるぜ」

平次の言葉の予想外さに、何んとなく皆んな顔見合せて黙りこくつてしまいました。ちよつどその時三人の下つ引は、砧きぬた右之助をつれて来たのでした。

「拙者をどうしようと言うのだ。無礼な事をすると許さんぞ」

昨日の町人とも武家ともつかぬ身みなり扮と違つて、今日は堅鬢かたびんつけ附でカンカンに結った鬘も、衣服、大小のつくりも、押しも押されもせぬ武家姿です。

「砧様、お手間は取らせません。昨夜、ここで起つたことを、皆んな仰しやつ

て下さいまし」

平次はぐつと下手に出ました。

「お前は何んだ」

「神田の平次でございます。十二年前の芸州に起った事、鳴川留之丞の悪事、何もかも存じております」

「――」

「それから、ゆうべ、貴方様が、ここへお出になつたことも」

「何？」

「懐ろの人相書を落していらつしやいましたね、――これ、この通り」

平次は土竈へつづいから出た人相書を、砧右之助に渡してやるのでした。

「成程それほどまで判っているなら、皆んな言つても差支えあるまい。――昨日この店先で、其方が土竈へつづいに何か隠してあると言つた言葉、あれを聞くと、い

よいよ絵図面が手に入ると思い込み、昨夜子刻ここのつ少し過ぎ、いかにもここへ乗込んで来たに相違はない——が、その時はもう万事終っていた。今ここで見る通り、鳴川留之丞も、鞍掛宇八郎もこと切れていたのだ。誰が殺したか解らぬが、拙者を取っては千載せんざいの遺恨いこん、鳴川留之丞は是が非でも討取るべき相手であったし、鞍掛宇八郎にも一言の怨うらみが言いたかった。拙者の父上は自殺して相果てたが、同じ役目の鞍掛宇八郎は、追放という軽い罪で済んだ。その上絵図面までも手に入れようと張合っていた」

砧右之助しゅつかいの述懐じゆつかいには、何かしら八五郎などには腑に落ちないものがあります。極端に家と名を惜むおし武家気質は、違った世界の出来事だったので。

「用意の懐提灯ふところちようちんに火を入れて見ると、幸い鞍掛殿の手に、私の捜している絵図面はあった。少し血に汚れているが、洗い浄きよめて旧主芸州侯にお還かえし申上げ、せめて亡き父上の亡執もうしゆつを晴したいと、それは誰はばかる者もなく持ち帰り、本

日はこれから、霞が関御屋敷に参上するところであった」

砧右之助の言葉は、立派に筋が通りますが、疑えばまだ、いくらでも疑えます。

「鞍掛様を誰が刺したか、お心当りはございませんか」

「ない」

砧右之助の調子はブツ切ら棒でした。そのとき不意に、一陣の桜吹雪さくらふぶきのように飛び込んだものがあります。

「砧右之助覚悟ッ」

閃ひらめくあいくちヒ首の下に身をひるがえ翻して、右之助は床几しょうぎを隔へだてて声を絞りました。

「覚えはないぞ」

「言うな、卑怯者ッ」

床几を廻って、ともすれば右之助に飛びかかろうとするのは、きのう銭箱騒

ぎを起した娘、——鞍掛宇八郎の娘お京です。たった十八、色の浅黒さも、眼の涼しさも、野の花を剪きつて来たような純な少女ですが、父親の無残な死骸を見ると、一も二もなく、砧右之助を敵と思ひ込んだのでしよう。ガラツ八も先刻そんな事を考えたくらいですから、咄嗟とっさの間には、まことに起りそうな間違いでした。

「違う、お嬢さん、敵違いだ」

平次は二人の間に割つて入りました。

「言うな」

少しあせつたお京、——蒼い顔、閃ひらめくヒ首あいくち、赤い帯。

「鞍掛棧を騙たし討たまにした曲者は、——仔細あつてこの平次が見破つた。八、逃げ場逃げ場を塞ふさげ」

「おッ」

ガラツ八は下っ引と手をわけて、茶店を遠巻に、グルリと円陣を描きました。

「今ぞ、御教え申しませう。昨夜、ゆうべ鳴川留之丞を討ったのは、間違ひなく鞍掛宇八郎様。鞍掛様を騙し討ちにして、へっつい絵図面といっしよに隠してあった、土竈の金を盗み出したのは、その弁次郎に相違はないッ、——横網の二階にいて、一と晩独り言を言っていた。その相吉も敵の片割れ」

「な、何を言う。岡っ引奴ッ、俺たちはそんな大それた事をするものか」
弁次郎と相吉は、飛び退いて^{きつ}屹と身構えました。

「証拠は山ほどある。夜露に濡れた弁次郎の袷には、一と晩明かした柳原土手の葉が附いているばかりではない。たもと袂に飛沫しぶいた返り血を洗い落した跡まである」

「えッ」

「脇差は川へ投げ込んだ。が、金はその丸太をてこ楨杆にして、へっつい土竈の下に隠して

ある筈だ。土竈から取出した金を、土竈に隠すのは働きだが、先刻さつき、——この平次が金の隠し場所が解つたと言つたとき、二人の眼は土竈の下へ吸い附いたのに気がつくまい。——それに槓杆てこの枕を捨てたのは宜いが、土竈へっついを据えた場所が少し動いていることに気が付かなかつた」

平次の論告は烈々として寸毫すんごうの仮借もありません。

「まだある、——弁次郎はきのう俺の話を立ち聴きしていた筈だ。土竈に何か隠してあると覺つて相吉と相談して薄明るい内に二階を脱出し、柳原土手で時を過した上、一人で忍んで来ると、留助はもう殺され、鞍掛様は夢中になつて土竈へっついを捜していた。——忍び寄つて後ろから一と突き、土竈の中の金だけ取つて逃げ出したところへ、砧様きぬたがやつて来た」

「——」

「隠れて様子を見てみると、砧様は絵図面だけ取つて歸つた。ホツとして出て

来ると、砧様の落した人相書が目についた。——弁次郎は猿知恵さるぢえを働かせて、それを土竈の中へ入れたのは、余計な事であつた。——さア、これでも下手人はお前たち二人でないと云うか」

詰め寄る平次。二人は顔見合せて、ジリジリと引き退ると見せて、

「えッ、破れかぶれだ」

ヒ首あいくちを振って左右からお京に殺到したのです。

「あ、危いッ」

平次の投げ銭は、僅かにそれを救いましたが、

「えッ、くたばつて了えッ」

二度目の襲撃、お京は床几しょうぎに足を取られて、横倒しになつた上へ、

「已れッ」

砧右之助はパツと飛び込みました。横合からお京に殺到する相吉を迎えて、

「わッ」

相吉が見事もんどり打ちました。

「あッ」

仰^のけ反る弁次郎。逃げ出すところを、ガラッ八に足の間へ薪^{まき}を投り込まれたのです。

「捕物だ」

両国の橋へかけての真昼^{ひとなだれ}の人雪崩。

「寄るな寄るな」

ガラッ八は精^{ばんせい}いっぱいの蛮^{ばんせい}声を張り上げてそれを喰い留めています。

×

×

「変な捕物だったね、親分」

帰り途、ガラッ八は相変らず平次の心境を叩くのでした。

「お蔭で一と組の良い若夫婦が出来上るよ。——お京さんの危いところを見兼ねて、フト助太刀したのは砧右之助の大手柄さ、あれで両家の面白くないわだかま蟠りも解けるだろう」

「そんな蟠りがあったでしようか」

「自分の親だけ自害して、絵図面まで其方の手柄にされちゃ、砧右之助ちよつと納まるまいよ。尤も絵図面は右之助の手に入ったが——」

「へエ——」

「武冢はうるさいな、八」

「もう一つ解らない事があるんだが——」

「何んだい」

平次もすつかり上機嫌です。

「身投げの場所を捜した女房というのは今日出て来ませんね」

「あれは身投げなんかじゃないよ、お京さんの乳母のお浅という女さ。お嬢さんが危いところへ行つたと知つて、下駄を片跛かたちんばに穿はいて本郷丸山から飛んで来たのさ」

「なアーンだ」

「それを身投げにしたところが俺の作だ」

平次は面白そうでさえありました。

「もう一つ、——脇差が本当に大川の底にあつたんですか」

「ないよ」

「へエ——」

「あつたところで見えるものか、それも俺の作だよ」

ガラッ八も少し驚きました。

「尤も、同じ親分の作でも、土竈へつひいを丸太の檣杆てこで起すと、その底から八百両と

いう小判が出て来たのは驚きましたね。——土竈の横腹から盗んで土竈の尻の下に隠す奴も馬鹿じゃねえが、それを見破った親分もエライ」

ガラツ八は二つ三つ首を振って眼を据えました。

「お、だ、て、ち、や、い、け、ね、エ」

「てんがんつう天眼通だったね、全く」

「なアに、順当に物を運んで考えただけさ。嘘だと思ったら大川をか、い、堀して見ねえ、脇差だつてきつとあの底から出て来るから」

二人は声を合せて笑いました。全くよき秋の日の夕ぐれです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十四年九月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

お秀の父



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>